

雲仙冥利は、箱庭学園二年十三組に属する風紀委員長である。彼の行き過ぎた正義は学園の風紀を過剰に正し、生徒たちから適度な反感を買っている。風紀委員会に所属する各委員もまた委員長の方針に従い、学園の治安を維持するため苛烈なる正義を振るっている。雲仙冥利は十歳である。若くしてその才能を認められ、ここ箱庭学園に飛び級で進学してきた文字通りの神童である。ただし、その天の邪鬼で邪気にまみれた笑みはむしろ、神の子よりか額面通りの悪戯鬼を彷彿とさせる。

彼は他人に厳しく、身内に甘い。時には風紀と名ばかりのスキンシップがなされている場合もある。ハイレムと言って差し支えない。無論、風紀委員会には男子も多数所属しているが、在籍する女子の矢印は全て雲仙委員長に向いているといっても過言ではない。

何故、彼はそれほどまでに愛されるのか。愛することを許されるのか。

十歳といえど、彼は既に自己を完結させている。彼に見ることができる幼さは、唯一背が低いことのみである。子どもを愛するように彼は愛せないし、子どもに愛されるように愛されない。それは過度なスキンシップからも明らかである。

けれども、傍目にはセクハラとしか思えない行為も、彼女たちは容易に受け入れている。委員長という、十三組という強権が成せる業と考える向きもあるが、そうではない。残念ながら。

ただ単に、彼は愛されているのだ。

雲仙冥利の信念を、正義を、存在を認められ、愛でられている。風紀委員会の最上段に立つ者として相応しい畏敬の念を、一身に集めているのだ。

故に、彼は孤高ではない。

ただ、過剰であるだけだ。

鬼瀬針金は正義の人であった。

ゴミのポイ捨てを行う者には問答無用で注意をさせたし、自転車の二人乗りを敢行する者には情け容赦のない追跡を試みていた。授業中の無駄な雑談や弁当の早食い、カンニング、時には公然と昼寝を決め込む輩にチョークを投げ込む役割を任されていたし、廊下を全力疾走するお調子者の背中に飛び蹴りを喰らわすことなど日常茶飯事であった。

彼女の正しさは度々反発を招いたが、多少の闊歩ならは返り討ちに処す程度の強靭さは備わっていた。

彼女はその性質上多くの敵を抱えていたが、志を共にするとはいかずとも、氣心の知れた友人ならば立派に存在した。

彼女は、自分の行いが正しいとは思っても、正しすぎると思ったことはなかった。罪を憎んだら人も憎んでしまうのはやむを得ないことだと思っていた。人を見て泥棒だと思つたことなかったけれど、いかなる人間も泥棒になり得ると信じていた。

それが、中学卒業までの鬼瀬針金である。

箱庭学園に入学した彼女は、それまでの人生と変わりなく、己の正義を發揮しようと意気込んでいた。そのために必要な身の置き所のひとつとして、風紀委員会を候補に挙げていた。だが、自分から積極的にアプローチを掛けるつもりはなく、他に都合の良い居場所があればそこに腰を据える考えもあった。

入学してからの一週間は、それまでの人生に沿って正義を執行していた。高校における不良は体格や口の悪さが割増されていたが、彼女にとっては壁が小さいか大きいかの違いでしかなかった。硬ければ殴り甲斐があるし、柔ければ直し甲斐がある。その程度の認識に過ぎなかった。

けれど、群雄割拠、生き馬の目を抜く箱庭学園にお

いて、生半可な精神論は災いのもとに他ならない。

普通の生徒でしかない一年三組鬼瀬針金が、二年十三組、風紀委員長雲仙冥利に目を付けられるということは、彼女が自覚していたにせよしていなかったにせよ、災難以外の何物でもなかったのだ。それこそ、天災と呼ぶに相応しい規模の。

「鬼瀬針金つてーのは、テーマか？」

唐突ではあったが、予想できない展開ではなかった。因縁を付けてきた悪漢共を適当に捌いた後、卑怯なる援軍が到着することはあり得ない話ではない。だから、その粗野極まりない誰何たれなにを聞いて彼女が振り返り、予想を裏切られ、声を失つたのも無理からぬ話だった。

日陰になった校舎裏、人氣も湿気もない乾いた地面の上に、積み上がった典型的な不良たち。明日には忘れられる彼らと対比されるのは、一見華奢に見える小柄な女子と、それよりも更に小さな男子だった。

同じ高校生とは思えない、少なくとも中学、あるいは小学生でもおかしくはない。だが、口の端を歪め、薄く開いた目を輝かせ、丈の長すぎる上着のポケットに両手をつまみ、見上げているにもかかわらず、あからさまに他人を見下しているその態度は、明らかに子ども離れしていた。

彼は、人の上に立つのが慣れているのではない。ただ、人の上から見るのに慣れているだけだ。

「……そうですけど。そういうあなたは、一体何者ですか」

返答次第では、撃滅する覚悟はあった。可能かどうかはわからない——事実、勝ち切ることが可能かどうかはわからなかった。戦闘力が垣間見えたわけでも、全身からオーラが放たれていたわけでも、不可思議な影が奇妙な形となつて彼の背後に存在していたわけでもない。が、どうあつても、自分と彼の間にある壁を砕くことはできないだろう、と思つた。彼はその壁の頂上に座し、悠然と自分を見下ろしている。

そのイメージだけは、何故か消えてくれなかった。

「ああ、オレ？ 聞いちゃう？ それ聞いちゃう？

……そっかー、知らねーのかーオレのこと。残念だなー、わりと有名人だと思つてただけだなー。んでもまあ、しょうがねーわな。滅多に表に出ねーしオレ」

ぼさぼさの頭を搔きながら、彼は身構える鬼瀬針金に自己紹介をした。

「——風紀委員会委員長、雲仙冥利つてもんだ。今日は、正義感に溢れる鬼瀬ちゃんをスカウトしに来ましたー。オレが。わざわざ」

風紀委員会。

数日前は魅力的だった響きが、今となつては神秘的な、蠱惑的な響きを伴つて鬼瀬の耳を打つ。雲仙冥利と名乗つた彼が率いる風紀委員会が、正義の組織であるという確信が得られなかった。

「……鬼瀬ちゃん、ですか」

どことなく馴れ馴れしいのもどうかと思つた。目付きもなんとなくいやらしい。子どもなのに。

「そ。こういうのは馴れ馴れしくいかねえとな。仰々しくてもいいんだが、オレが肩肘張つても全然似合わねえんだよなー。こういう時だけはガキなのが悔やまれるぜ」

「でも、どうして私をスカウトしようなんて思つたんですか。その、別に、特別なことは何もしてないですよ？ それこそ、あの生徒会長みたいな」

「いーんだよ、別に。飛び抜ける必要なんざねーのさ。そもそも、アレは飛び抜けてるっていうレベルじゃねえ、はみ出してるっていう方が正解だ」

第九十八代箱庭学園生徒会長、黒神めだか。

彼女についての記述はそれこそ無数に存在するが、その全てにおいて、異常な成績を収めていると判断できる。なればこそ、彼女は異常なのだ。

そして、普通の生徒である鬼瀬針金と対峙している、雲仙冥利もまた。

「起きなさい。起きなさい、私の可愛いみそぎや」

球磨川褌はゆつくりと目を開ける。カーテン越しの陽光が柔らかくまぶたの上を撫でる。枕元に立つ人物が、褌を見下ろしている。

「おはようみそぎ。もう朝ですよ」

鈴の鳴るような声が褌の耳をくすぐり、ベッドのスプリングが軋んで、褌の体重をやわらかく包む。そうして、褌のまぶたは再び重みを増す。

「『あと五分……』」

「型にはめたようなセリフで二度寝しない！ 布団をかぶるなっ！」

布団をはがそうとする魔手に抵抗すること十五分。

褌の朝としてはこれでも早い方で、遅刻寸前までの惰眠は日常である。

目をこすりながらようやく身を起すと、穏やかな笑みを浮かべる人物と目が合う。

「今日とはとても大切な日。みそぎが王様に旅立ちの許しを頂く日だったでしょ」

「『……人吉先生？』」

「この日のためにお前を勇敢な男の子に育て上げたつ

もりです」

はて、と褌は思案する。あたりを見回す。褌の部屋ではない。木造の、古めかしい感じのする、洋風の部屋。天井を見ることが一番の違和感に気付く……：蛍光灯がないのだ。そして、人吉瞳の言動。

褌は理解する。彼は過負荷であるが、バカではない。「人吉先生、確かに僕は今でも先生の事好きですけど、お母さんにはなつて欲しくないんですよ。僕は女性として人吉先生のことが好きなんですから」

「状況を飲み込めた顔になつての第一声がそれ、つてことに戦慄するわ……」

「『あ、もしかして近親相姦とかご興味がおありですか？ 僕もそういつた方面のエロ本にはお世話に――』」

わかつたもうしゃべるな、と口で言う前に手が動き、踵持ち前の裁縫スキルによつて文字通りお口にチャック、となる寸前に褌はベッドから飛び立ち、床に着地する。

「『やだなあ先生、思春期の妄想くらい大きく許容してくださいよ』」

「不健全な若者を叱るのも大人の役目だからね」

「『……先生、さっき僕に、型にはめたようなセリフ、なんて言いましたけど、むしろ先生こそ最初から型通

りのことしか言っていないじゃないですか」

瞳は苦笑する。

「そういうのも大人の役割、つてねー……とにかく、球磨川君、いえ、みそぎ。今のあなたは私の息子で、勇敢な勇者の息子。今から王様に魔王討伐の許可をもらいに行くの。オーケー?」

「オーケーも何も」と、襦は肩をすくめて見せる。

布団から出た彼が身にまとっているのは、パジャマではなく、動きやすい騎士服に、革製の手袋とブーツ。

「……選択肢なんてないでしょう? あったとしても、「いいえ」を何度選んでも無限ループするに決まっている」

「残念だけどその通り。私だって抵抗したいんだけどね……今回は私にはその役目は回ってこないみたい」

「大丈夫ですよ」

襦はマントをひるがえし、瞳の横をすり抜けて、ドアの前に立つ。

「こんな面白そうなゲーム、僕がさっさと終わらせちゃいますから」

それに、と言いながら、ドアを開く。

「僕、ドラクエ大好きなんですよ」



家の外はのどかな町並みだ。井戸の側で主婦たちが談笑し、武器屋や道具屋が声を張り上げている。特に目的がある風でもない人々が、街道をふらふらと散歩している。町は頑強な城壁で囲まれていて、外へ出るためのゲートには見張りの兵士が槍を携えて待機している。襦は、適当に近くの人物に目を付けた。

「ねえ、お城ってどっちなのかな」

「ここはハコニワの町です」

「教えてくれると嬉しいな」

「ここはハコニワの町です」

「……」

「ここはハコニワの町です」

「『ところで君、いつぞやの体験入学の時にいた六百人のモブのうちの一人だよ? 僕の所信表明、どうだった?』」

名もなき町人はその場にくずおれた。

「……さて、のんびり遊んでる場合でもないか」

襦の見上げた先には、町のどこから見ても見失いようのない、巨大な城がそびえている。「ちやつちやつと遊んじゃおう」

城門は豊かな水を湛えた濠の向うにあり、跳ねあげ橋がかかっている。何人かの見張りの兵士がいるが、

襖が近づいても、誰一人として目をあわせようとしな
い。少々不安な警備だが、おかげで襖は面倒な入城手
続きなどもなく、謁見の間にスムーズにたどりつく。
繊細な細工を施された柱が並び立ち、壁一面には赤い
サテンのカーテンである。中流階級の家一軒が収まっ
てしまいそうな広々とした空間の真ん中に宝石と金で
飾られた玉座があり、王冠を頂いた人物が鎮座してい
る。

「よくぞ来た！ 勇者みそぎよ！」

王が歓迎の意を表して立ち上がる。胸に深々と刺さ
った螺子を揺らして笑う。

「『……いやさ、ここは王土くんとかがいるべきなん
じゃないの』」

「君の父は戦いの末火山に落ちて亡くなってしまった。
しかしその父の跡を継ぎ旅に出たいという君の願い、
しかと聞き届けたよ」

「『ねえ、王様……』」

「王様じゃない、親しみを込めて安心院さんと呼びな
さい」

人差し指を唇に添えるなじみを見て、襖は息を吐く。
「『ま、確かに安心したよ。黒幕が安心院さんだつて
わかれば、だいたいのことには説明がつくからね。い
きなりこんな、ジャンプで一年に一回くらい載るスピ

ンオフマンガか同人誌みたいな世界に連れてこられた
って納得できるってもんさ』」

「おいおい、さすがにそれは買いかぶり過ぎだぜ球磨
川君。いくら僕の一流のスキルをもつてしたつて、不
可能なことだつてあるんだからね。それに、こういう
クエストの黒幕は普通、王様じゃなくて魔王だぜ」

しかし、なじみの言葉は襖の言ったことを否定して
いない。人を夢の世界に落とすスキルがあるのなら、
その夢の姿を自在に変えてしまうスキルがあつたところ
でおかしくもない。お互い、言外に承知しながら、
襖となじみは薄い笑いを交わす。そばに侍つていた兵
士が、二人の笑いの得体の知れなさに身震いする。襖
は肩をすくめる。

「『それにしても、難儀なことをしてくれたもんだよ。
勇者なんて、僕から最も遠い役割じゃないか……勇者
は、絶対勝たなくちゃいけない。そこに百戦勝ち知ら
ずの僕を選ぶなんて、ミスキャストにもほどがある
ぜ』」

ふふん、となじみは鼻を鳴らす。

「球磨川くんはジャンプばかり読まずにライトノベル
とか読んでみなよ。最近の魔王と勇者の形つていうの
は、存外に多様なんだぜ？ もはや魔王が善人で勇者
が極悪人だったり魔王と勇者が仲良しこよしでイチヤ

「ん？」

「あら？」

「……………」

「……………」

廊下の角、階段の前で鉢合わせ目が合った二人が、そこから一歩ずつを踏み出した後、動きを止める。

昼休みを迎えざわつき始めていた廊下は何も変わら
ず、しかしその一角には静寂が生まれた。

場の空気が僅かに、確かに変わる。

気まずい、と言うわけでもなく、今となっては何か
深い事情や因縁があるわけでもないが、どうあっても
普通ではない雰囲気。

互いにとつて、何かしらの言葉を切り出しにくいと
言うわけではないが、どう言った言葉で切り出すかを
思考する程度の浅い間柄の相手。

そんな微妙な人物を前にして。
開け放たれた窓から少しの風。

リボンが揺れる。

アホ毛が揺れる。

特に長い間と言うわけでもなく、ここまで三秒程度。
しかし静かな空間での三秒と言うのは、当事者たち

にとつては意外と長いものである。

一秒程度は長く感じていたかもしれない。

「おやおや、こんなところで出くわすなんて奇遇です
ねえ、人吉クンのお母さん」

間を破った、と言うよりは先手を取った、と言うべ
きだろう。アホ毛を揺らした方——不知火半袖が笑み
を浮かべ相手に声をかける。

「そーねえ。戦拳の時は会長戦では顔を合わせただけ
だから、こうやって話すのは初めてだわね、不知火さ
ん」

が、それに応じるリボンを揺らした方——人吉瞳も、
後手に回る事を選んでいたのか、特に淀みなく応じた。

「あひやひや☆ そーんなかたつ苦しい呼び方しなく
ていいですよ。親友のお母さんなんですからもっと親
しげに呼んでくれたって構いませんよ」

左手に持ったあんパンを口に放り込みながら、笑い、
右手をひらひらと振ってみせる。

「あらそう。じゃあ、不知火ちゃんもお気軽にお願
いするわね」

「わざわざお気遣いなさなくても、あたしは最初か
らそーしてますよん」

互いが選んだ手が噛み合った、と言うこともあり、
一種、攻防のような三秒があったにも関わらず、普通

の和やかな進行となった。

そもそもからして、初めて会話をする相手とは、誰であつてもそう言う間は生じがちなものなのだ。ならば、相手の事を知つていて、多少面識がある程度の方と交わす最初の会話としては、むしろこれは極めて良好なものであるとも言えよう。

「でー？ なにやら急いでる様子だつたけど瞳さんはなにやつてたんですか」

「ああ、うん。ちよつと善吉くんがねえ。一緒にお昼を食べようと思つて、お弁当を渡そうとしたんだけど逃げちゃつて」

「……………」

右手に提げた弁当箱が入つてるのであろう、少しばかりファンシーな柄の布袋を軽く振りながら、なかなかあ、とそう言いたげな表情になつた瞳に対して、半袖はとりあえず笑顔のままの無言で応じる。

生徒会戦争では江迎怒江相手に堂々とマザコン扱い上等宣言をするなど、まざまざとその親子仲の凄まじさを見せ付けていたが、流石に多くのクラスメイトの居る前でやられるのは今でも抵抗があるらしい。

人吉も災難だねー、と思ひながら半袖は大ぶりのクロワッサンを口に放り込み、そのうちに一組に顔を出すことを決意する。

親友が酷い目に合つてゐるのなら安全圏から眺めていたいが、親友の面白い光景が見られるのなら適度に近い距離から眺めていたい。不知火半袖とはそう言う人間である。

それに、マイナス十三組へ鞍替えしたとは言え、元々は一組の生徒だ。皆顔見知りだし、そこらへんの面倒くさい事情は黒神めだか生徒会長絡みゆえ深く考へてないやつも多いだろうから、紛れ込むくらいならどうつてことない。

ノーマルノーマルと言うが、この学園の生徒の寛容さと言うかよくわからないところでの適応能力の高さは、チームトクタイやら十三組に多少アテられてゐる気がどうにも否定出来ないのだ。

一種の防衛本能のようなものなのだろうが、なんにせよありがたい話である。

「そだ。不知火ちゃんは、善吉くんが逃げ込みそうでかつお昼ご飯を食べられそうなところに心当たりあつたりしないかしら？」

瞳からのその問いに、半袖は咀嚼しながら人差し指を顎に当て、視線を宙へ上げ、思考する。

と言つても、善吉の居場所についてではない。

言うか言うまいか、についてだ。

「残念ながらねえ」

視線を瞳の方に戻し、思考の結果を告げる。

「ない、と言うのは事実だ。善吉の現在の居場所について、半袖には確信ならあったが、心当たりは、ない。そっかー、と瞳はそっけなく返し、溜め息を漏らす。

「以前の善吉くんはローラーシューズの機動力を侮って入れてたからどうにかあったけど、今はそれも計算に入れないかしらねえ……」

「あひやひや！ しかし人吉も隅に置けませんなあ。可愛いお母さんの美味しそうなお弁当を拒否して逃亡なんて」

「あら不知火ちゃん。こんなおぼさん煽てたって何も出やしないわよ？」

「いやいや、そのお弁当が勿体無いんであたしが貰っちゃおうなんて思ってますから」

本音を隠さず、正直に狙った獲物を口に出してみせる。元より隠すための建前は持ち合わせていないし、そもそも隠すような本音でもない。

瞳は軽く腕を組み、ふむ、とひとつ頷く。

「……………ま、善吉くんは適当にパンでも買って食べるだろーし。息子の親友との親善の意味も込めて」

「くい、と弁当箱の入った布袋を目の高さまで上げて笑い。」

「これは不知火ちゃんに進呈しちゃいましょう」

「そんなつもりじゃなかったんですけど、そこまで言われちゃったら仕方ないですねー人吉も見つかりそうにないしあたしが貰っちゃいます☆」

「じゃあ、どうしよっか。いい天気だし、どこか見晴らしのいい場所にでも……」

「いやいや瞳さん。お昼ごはんと言ったらやつぱりあそこでしょ。それに——」

「はいそこー！」

半袖の言葉を遮り、廊下を走った威勢のいい声が半袖と瞳の耳に届き、そのまま奥まで突き抜けて行く。

そのまま廊下の突き当たりで跳ね返ったのではと錯覚させたほどの物だが、実際には、その声量は多少大きい程度のもの。ただ、その声に乗せられた確固たる意志と発声の良さが全体としての通りをよくしたのだ。と、廊下にいた生徒たちにはそう思われた。

そして、確信へと変化する。

発生源は風紀委員、目標人物を指差している手錠メリケンの鬼瀬こと鬼瀬針音その人であった。

廊下全体の動きが鈍くなった後、駆けるでもなく（校則違反なので）のっしのっしと大股で歩み寄ってくる、眼鏡と手錠を光らせる少女に対して瞳はほー、と少し感心したように息を吐き、

『乾杯!』

箱庭学園旧校舎、軍艦塔グランドタワーのとある談話室。

まだ肌寒さの残る三月の空気を感ぜさせない、空調の利いた室内に、六人の少年少女がテーブルを囲んでいた。どうやら、彼らはパーティというより、ちょっとした会食を催してようだった。その証拠に、部屋には飾り付けなどは一切なく、テーブルに食べ物が並んでいるだけだった。

さてしかしてこのテーブル、いささか尋常じんじょうとはいいたい様相を呈ていしていた。まずテーブル自体がかなり巨大な円卓であり、さほど広くはないこの談話室にどうやって運んだか疑問が残る。

だがそれ以上に驚くべきなのは、テーブルの上である。いかなればそこはジャンクフードで再現した満漢全席、高級ホテルの朝食バイキング会場を高カロリィで埋め尽くして、ひとつの卓上に圧縮せしめたような有様だった。間違いなく、この場にいる六人の少年少女全員^{全員}の体積を軽く上回る容量である。

……そんなありえない食べ物の山が、既に三分の一消し飛んでいることに、事情を知らない者が聞いたら顎を外すだろう。それが、六人の中で一番小柄な少女の仕業ならばなおさらだ。

「ほらほらみんな、早く食べないとなくなるよん。せ

つかくあたしがポケットマネー出したんだからさ」

その一番小さな少女は、頬まで脂と食べかすにまみれた顔で、ほかの五名を促す。

「フフフ、食欲出しているのか、無くせばいいのか、まったくわからない勢いだねえ」

黒い長髪の優男といった風の、年長者めいた少年——いや彼だけは青年といった方がいいかもしれない——は、朗らかに笑う。

「紙皿使って取り分確保しておいた方がよくね?」

その青年と似通った顔立ちの、しかしその剣呑な目つきでもって雰囲気を異にする少女は、手早くこの場の面々に、紙皿とフォークを投げるように渡していく。「わ、私ダイエツト中なんで、ジュースだけでも大丈夫ですよ」

大きなリボンを頂く緩いウェーブヘアの少女は、食器を受け取りつつも、それに食べ物をよそおうとはしなかった。

「ダイエツトカー、私は改造のおかげですっかり縁なくなっちゃったからなあ。女子力発揮できないかもね」

室内でもニット帽をかぶり、引き締まった体軀を誇示するような露出度の高い少女は、勢いよく骨付きフライドチキンにかぶりついた。

「僕は未だに、その女子力というものに合点がいかなくて困っているんだ。うちの妹も、じきにそういうこと言い出すのだからかね——」

最後に皿を受け取ったのは、髪型、目つき、顔立ち、体格、なからなまでに刀のように研ぎ澄まされた少年である。彼が握ったフォークだけ、なぜか凶器の如き鈍い光が宿っているように見えた。

「めだかちゃんも女子力アップとか言い出したら、新世代のエネルギー産業でも興せるかもしれないねえ」
「女子力発電所ってか。冗談すぎて笑えない加減が笑えるじゃねーか」

兄妹がそうつなげると、六人は全く同時にワツと笑いでわき返った。

黒神真黒。

名瀬天歌、もとい黒神くじら。

江迎怒江。

古賀いたみ。

宗像形。

そして、不知火半袖。

いずれも、箱庭学園の生徒、及び元生徒である。箱庭学園の今年度の卒業式、ならびに修了式はすでに終わっていた。今は春休み中であり、巨大極まる箱庭学園の敷地も、流石に静かなものだった。談話室の

談笑程度、巨大すぎる建物の中では、反響しきる前に減衰する。

「そうそう、聞いた？ 球磨川先輩の卒業パーティのこと」

「あ、あの話、もう伝搬しちゃってるんです？」
めいめい、自分の紙皿に食べ物をよそい終えたところで、古賀いたみが話題を切り出してきた。江迎怒江は、いたみの話に心当たりがあるように、彼女へと目を向けた。

「おーおー、そーいや江迎ちゃんもあのパーティには参加してたんだったな。生徒会候補生と過負荷組つーわけわかんねー彩りの。正直俺も出たかったんだが、都合つかかなかったんだわ」

黒神くじらはいたみのコップにジュースを注ぎながら、惜しいことしたぜ、と呟く。

「その話なら、僕も妹からある程度聞いているんだが……よかつたら、当事者にことの顛末を伺ってみてはどうだろうか」
宗像形はそうやって静かに怒江を促すと、怒江はお

ずおすと話し出した。

「大変だったんですよ……球磨川先輩が、王様ゲームやろうって言い出したところからいやな予感はずなりましたが、よりによって、喜界島さんと財部さんに……」

……

「ほうほう、それでそれで？」

くつちやくつちやとビザのチーズを音を立ててすすりながら、不知火半袖は怒江を促す。すると途端に、怒江は顔を赤らめて、それを冷やすように両手を頬に当てた。

「その、負けフラグ全開の割に王様になった球磨川先輩、指令は頬にキスだったんですけど……：：：：：ヒートアップしちゃった喜界島さんと財部さん……奪い合うように球磨川先輩をマウストゥマウスで！」

「ワーオ！」

「ワーオ！」

予想はしていたが期待を裏切らない話の内容が琴線に触れたのか、くじらといたみは見事なシンクロで関の声を上げる。女子力である。

「球磨川くんときたら、何とも男冥利に尽きるじゃないか。しかもダブルメガネでインフィニティときたもんだ。僕も妹二人にしてもらいたいものだよ……」

「肺を風船のように膨らまされるのと、舌を引きずり出されて噛み切られるのを、交互に味あわされてもいい？」

「え」「え」「え」

真黒とくじら、そしていたみは呆気にとられて、形

に視線を注ぐ。半袖はにやつきながらフルーツサンドを頬張り、怒江はまだ頬を赤らめたままだ。

「恋のやつに聞いたんだよ。球磨川くん、パーティの後で病院送りになったってさ」

形がしめやかに告げる。恋とは勿論、宗像形の妹である宗像恋のことだ。

「……そうか。兄貴は、めだかのヤツの肺活量測定器になりたいわけだな。そのうち頼んでみれば？ あ、俺だったら舌くらい遠慮なく噛み切つてやるよ？」

「……ははは、善吉くんに申し訳ないからやめとくよ」

真黒は些か青い顔を見せた。

「しかし、球磨川の旦那なら、大嘘憑きで病院いらすだろうに。なんでまた担ぎ込まれたんだ？」

「大方、『女の子のキスを嘘にするなんてとんでもない！』くらいの童貞発言はかましたんじゃない？」

一瞬、この場に球磨川袂が現出したのかと思えるくらい、半袖のものまねは恐ろしい再現度だった。

「正解です不知火さん……って、よくあの人の括弧つけたものまねができますね」

「そんなの誰だつてできるさね。あの人は薄皮が剥がれれば見え透いてるんよ」

ちゆるちゆると、伊勢海老の半身を吸いながら、な

「彼女、か。そうだね……確かに彼女を過負荷^{オーバーロード}と呼ぶのは間違いなのかもしれない。どれだけ不遇で不幸で不穏^{不安定}としても、それを本人が認識していないのなら、彼女の世界は幸福なままで。世界に対する劣等感に常に苛ま^{さいな}されている僕たちとは、根本からしてまるで違うと言ってもいい。だけどね、それでも彼女は間違いなく過負荷だ。どうしようもなく、同情しようもなく過負荷だと言わざるを得ない。

何故なら、彼女は世界と絶対に相容れない。

この世の理を全て無視して、彼女は彼女だけの世界に生きている。

はつきり言つて彼女は無敵だ。この世で彼女に勝てる人間なんて誰ひとり存在しない。そう、あのめだかちゃんだつて彼女の『能力』の前では掌で弄ばれるだけだろう。勿論^{もちろん}めだかちゃんだけじゃない、『不慮^{ふろ}の事故』を持つ君も、『致死武器』を持つ飛沫ちゃんも、そして勿論^{もちろん}この僕だつて、彼女の前ではただの道化に過ぎない。誰ひとり抗うこともできず、運命の濁流に押し流されてしまうだろう。

それでも彼女は過負荷だ。
悲しいまでに過負荷なんだ。

彼女は誰にも勝てない。

彼女の望みは何ひとつ叶わ^{かな}ない。

彼女の希望に応えられる者はなく、彼女の苦しみを理解する者もなく、たつたひとりで孤独なまま死んでいく運命。

だから僕は彼女を呼んだ。

過負荷^{オーバーロード}たちと同じ苦しみを知る彼女を、生徒会との選挙戦の前にこの学園へと招いた。友達にはなれないかもしれないけど、仲間にはなれるかもしれない、そう思つて彼女をこの学園に呼んだんだ。

残念ながらと言うべきか——僕は彼女のお眼鏡には叶わなかつたけどね。そりやもう文字通り、眼中に入られて貰えなかつたよ。だからこそ助かつたと言うべきなのかもしれないけどね。だってもしも彼女の『恋する乙女は地雷原』に見初められていたら、僕なんか一歩目で爆死していただろうから。

うん？

そんなに凄^{すご}いのなら選挙戦に出てもらつてはどうかだつて？

おいおい、無茶を言うなよ。彼女が選挙戦に勝てるはずがないだろう？ 君は今まで一体何を聞いていたんだい？ やれやれ、そんなことではこれから先が思いやられるぜ。いいかい、蛾々丸ちゃん。

彼女は無敵だ。

だけど彼女は誰にも勝てない。

何故なら彼女は——」

S

素晴らしいものは地獄からしか生まれない。

それが俺の根幹であり、根底であり、行動原理だ。

へらへら幸せそうなツラしてるヤツを見るにムカつくし、生温い友情ごっこや甘っちょろい恋愛奇譚には殺意すら湧いてくる。人が人として生まれてきたことに意味があるとすれば、それは何かを生み出すこととでしか有り得ないし、だとすれば悠長に緩慢に無駄な時間を過ごすなど罪悪といっても過言ではなく、一分一秒を惜しみに惜しんで進化の道をひたすら邁進しなければならぬ、咎だ。食事を睡眠を娯楽を趣味を恋愛を友愛を家族を無駄の一言で切り捨てて、ありとあらゆる快楽を代償に専心してこそ、初めて素晴らしい何かに辿り着ける、に違いない。フラスコ計画の元統括責任者であり、研究の一環として人体改造すら嗜む俺にとって、等価交換というものはニュートンなんかに指摘されるまでもなく自明の理であり、犠牲なくして何かを得ることなど出来ないという残酷な事実は、生まれる前から俺の脳髓に銘記されていた。

それからまあ、色々あって。

結果的に俺は、自分の根幹であるそういった思想を半ば放棄したような形になっている。その選択を後悔しているわけではないが、どこか後ろめたさを感じているのも確かだった。

今の俺は古賀ちゃんのことを自分のポリシーなんかよりずっと大切だし、黒神やら人吉くんやら高貴くんやらその他諸々を、それなりに大事にしたいと思ってる。

それでいいと思ってる。

だけどそれは素晴らしいものを生み出すことを諦めた代償として、墮落して零落していく自らを嘲笑うことと引き換えに手に入れた、仮初の幸福だどどこか投げ遣りに認識しており、結局のところ俺の中にある原則原理からは丸つきり外れていない、変わっていない、矛盾していない。俺は全然ちつとも改心なんかしていないし、今がそうだからといって今後もそうだとは限らない。

『どっつつかずの名瀬』

裏切ってはならないものを裏切り、禁忌と呼ばれるものを弄び、善も悪もごちゃまぜに、気分次第で乗り換える——それがこの俺、名瀬天歌だ。

だからまあ。

今回の事件ともいえない事件は、エピソードと呼ぶ

にも値しない、ちつぽけで、些細で、本編においても一行たりとも触れられないであろうこのくだらない物語は、結局のところ俺が俺であるが故に巻き起こされたものなのだろう。俺が俺であるせいで、引き起こされたものなのだろう。

これはくだらない物語だ。
些細でちつぽけで何処にでもあるような、ちよつとした手違いで世界が減んでいた程度の——くだらない愛の物語だ。

S

「なーんや、今日はひとりかいな自分。黒神ちゃんたちと一緒になかったんかい？」

学食で遅めのランチを取っていた俺に、やけに馴れ馴れしく親しげな声をかけてきたのは、誰であろう三年の鍋島先輩である。

「そんな露骨に嫌な顔すんなや、ウチが傷付いたらどうしてくれんねん」

ちつとも傷付いてなさそうな顔でへらへら笑い、断る暇も与えないほど自然に隣に座る。

「……つか席なら幾らでも空いてるじゃねーか。なんでもわざわざ俺の隣に来るんだよ」

「んー？ なんや恥ずかしがり屋さんかい自分。ええやん、考えてみたらウチ、名瀬ちゃんとまともに話したことほとんどあれへんかったしな。ここは一発、しつぱり親交深めようやないかい？」

うぜえ。

俺も大概丸くなったものだが、それでも大して親しくないも他人と交友を深めようというほど零落れちゃいない。文句の一つも言つてやろうと振り返つたところで、ふいに言葉に詰まる。

「おまえ……そんなに食うのかよ？」

箱庭学園名物Aランチ——食育委員会なるものが生徒自身によつて運営されているからだろう。育ち盛り食べ盛り学生達の声に応える形で編み出されたそれは、餓えた野獣にも等しい体育会系運動部員ですら文句のつけようがない質と量を誇っている。日替わりどころか二時間単位でメニューが変わる現在のA定食は、メインディッシュである国産和牛ステーキ三百グラムに加え、温野菜のソテーに付け合せのめんたいパスタ、オニオンスープにパンかライスをお好みでという、ランチと呼ぶにはちよつと贅沢すぎる仕様だ。

ところが鍋島先輩はそれに加えて、カツ丼、ラーメン、野菜炒めに酢豚という、食い合わせも何もあつたもんじやない出鱈目な組み合わせを一つのトレーに器

《— 3625 Day》

十年前のことである。
十年前の、夢である。

「あるさ。何を言っているんだいきみは。そんなことは瞭然りょうぜんじゃないか。そうであって当然じゃないか。もしかしてだきがきみにはあれが、怒った親の平手ひらでよりもおつかない、どうしようもないものに見えたのかい？
だとするならば、そう、まずは安心したまえよ。まったくひどい顔だ。なんでもつたいない。人間、本当にキレイに笑っていられるのはきみぐらいに純粹じゆんじゆんなうちだけなのだから、辛いことから積極的に目を背けたほうがあれこれ何かとお得えとくだぜ？

しかたないなあ。いいかい。じゃあ、今日は特別大サービスで、お姉さんが迷えるきみに、明日から使える世の中の真実というやつを教えてあげよう。

きみが好きな物も。嫌いな物も。いてほしい物も。いなくなつてほしい物も。離したくない物も。離れるしかない物も。覚えていたい物も。忘れたい物も。全部、どうでもいいことなんだ。

くだらない。つまらない。総じて並べて意味がない。この世には真剣に取り合うほど価値のあるモノなど、

何一つ存在しないんだよ。

—— おお。いいね。その顔はいい。まるで蟻あまの巣を煮詰めたような心の浮遊だ。今のきみに、実によく似合っている。

そんな顔が出来るなら、僕の言っていた意味も理解出来ると思う。
そうだ。

この世に価値があるモノなどない。

なれば、つまり。
そう、ゆえに。

相手がしたり顔で訴えてくる自分のすばらしさとやらに、真摯まじんに真正面から付き合つてやるほどの義理も、また、存在しない。

だからこそ繰り返そう。きみの質問と、それに対する僕からの解答を。

『あいつに。どんな辛いことも何かに押しつけてきた、自分にすべての辛いことを押しつけて逃げ出した、あいつに。この身体を突き破り溢れそうな苦しみを思い知らせてやれる方法なんて、あるのだろうか？』。

あるさ。そして、それはもうどうやら僕が手を貸し口を出す必要すらもないらしい。きみの執念は、きみの妄念は、おめでとう、きみを助けるべくきみだけの病理となつて心に絡んだ。

よかつたねえ。まさに冥利に尽きるというやつかな。可愛い可愛い授かりものだ、大事に大事に育てたまえ。大切なのは忘れぬことだ。忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え、平和に呆けず辛さを抱えて想い信じて待ち望む。その蓄積こそが、その累積こそが、無形だからこそ無尽蔵に膨れ上がる無限の代償請求こそがきみを囚えるきみの美点だ。

未来に希望を。

明日に誓いを。

不明の自分に呪いを託す。

嗚呼。この僕をして賞賛に手を打たせしめたぜ、
純粋ききみよ。

なんて、気持ち悪い。

僕は今まできみほどに——おぞましく前向きな鬱屈
を見たことがない」

名前も知らない女の夢はそこで終わった。

目覚めた子供はその内容を覚えていなかっただけれど、
何か不思議と晴れやかな気持ちで。

とりあえず、今朝も、いつものように。

自分がまだ生きている苦痛に泣くことにした。
泣きながら、笑うことにした。

カウントアップはそこから始まる。

以後十年。

健やかなる時も病める時も富める時も貧しき時も。

片時も肌身離さず、いつも頭の片隅に。

痛みを。傷みを。

悼みを、ずっと。

抱えて、抱きしめて、抱擁して。

いつか、気持ちをもそのままに、色褪せず届けられる

その時を、恋する乙女のように信じて。

大切に、大切に、大切に。

恨みは。憎しみは。

楽しみは、最早。

その中心に何があつたのか、窺い知ることも出来な
くなるほど、丁寧に育っていく。

時間は進む。

利息は膨らむ。

幼き心を蝕みながら。



——過負荷、成立。

——苦痛銀行、設立。

——返済開始まで、あと三千六百二十五日。

《1 Day》

言葉とは千変万化の千両役者だ。無尽のドレスで身を飾り、無限の役割を務めて踊る。

しかし。限定された個人の枠にとどまらず同類同族同病に対する自称他称を問わない全体への形容は、どうあれ結局のところただひとつの方向へと否応なく収束し、満場一致の帰結を果たす。

即ち、マイナスへと。

曰く。

無意味で、無関係で、無価値で、無責任。

曰く。

敵対したくもないくらい気分が悪い。

曰く。

向かい合っているだけで心が凍えそうだと。

曰く。

生きがたきを生き、負けがたきを負けてきた。

曰く。

過負荷。

一から十までおぞましい、聞くに堪えない悪評の海。底知れぬ汚泥の成分は、彼らが人生で最も多くの時を慣れ親しんだ、心地よくすすらる罵詈雑言。

その全ては適切である。行動によって証明されてきた本質であり、偽らざる本性を的確に表している。否定可能な虚言も誇張も、一切含まれてはいない。

何もかもが、彼らにとって。飲み干すしかない罪業である。

むしろ喜々とし。勳章のように噛み砕いてきた毒薬である。

罵倒に笑う。

悪徳を謳う。

不幸を糧に不幸を肯定め、ばらまくように分かち合う。その非常識にして非道徳極まりない有様こそが、過負荷と呼ばれる彼らのごく平均的な精神構造であり、決定的な劣等性質だった。

だった。

だった。

だった、のだ。

「僕の負けだよ。ああ、ちくしょう、悔しいなあ。幸せだなあ！」

二学期が来るより早い、夏休みの終わりの前。

最低の中で他の誰よりも何よりも最低だった混沌が、救われることが出来るまでは。